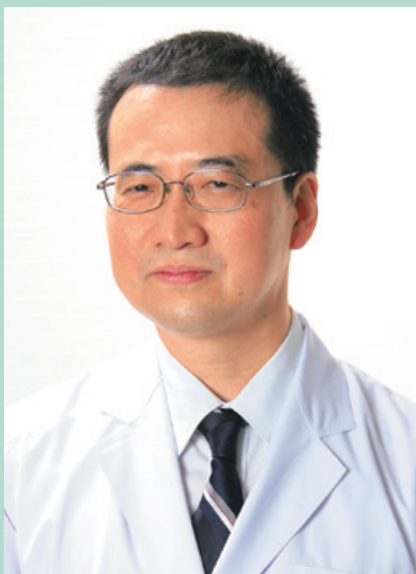


● 教室(診療科)の特色 ●

病理部・病理診断科は、臨床科から提出されてきた生検・手術検体などの病理診断や細胞診断を行う病院内中央診療部門であり、病理学教室と密に連携しています。昨今の医療の高度先進化に伴って、病理診断に要求される内容は増えており、単なる組織診断のみならず病変の生物学的側面(悪性度や増殖能など)に関する評価にまで及んでいます。それらを可能な限り網羅したうえで、更なる情報発信のソースでありたい——私たちは病理診断をそう考えています。



栗栖 義賢(くりす よしたか)准教授(科長)

- 専門分野
病理診断学・細胞診断学
- 主な学会／専門医資格
日本病理学会、日本臨床細胞学会／病理専門医、細胞診専門医
- 研究課題
人体病理

● 教室(診療科)の概要・特徴 ●

- ① 病理学に関する教育・研修はトータルにコーディネートされており、スタッフは専門性(消化管・肝・呼吸器・婦人科・皮膚科など)を備えた陣容となっています。
- ② 高度先進医療が進む中、臨床科からの幅広い要求に対応して、最新の知見が盛り込まれた病理診断を行っています。
- ③ 年間にして生検・手術材料12000件、細胞診材料13000件余りが診断されており、すべての臨床科からの偏りの少ない症例を経験することができます。
- ④ 近年は30体前後／年を推移している病理解剖を病理学教室と連携して行っており、その結果の討論の場であり、初期研修医のための貴重な教育の場ともなっているCPC(臨床病理カンファランス)も30回／年ほど開かれています。
- ⑤ 病理は身体的負荷、時間拘束が比較的少なく、「女性にやさしい」という魅力があり、現在、2名の女性病理医が在籍(内、1名は病理学教室と兼任)しています。

● 教室(診療科)指導医・上級医 ●

氏名(職掌)	専門医	主な学会
安田恵美(講師、医長)	病理専門医、細胞診専門医	日本病理学会、日本臨床細胞学会
平田公一(助教)	病理専門医	日本病理学会

■連絡先：大阪医科大学病理部・病理診断科 TEL:072-683-1221(内線3315)

■ホームページ：http://hospital.osaka-med.ac.jp/about/dept_list/central_institution/d10/index.html

初期臨床研修プログラムの特徴

初期研修2年目に選択希望診療科として病理部・病理診断科を選択した初期研修医を対象に、病理研修を行います。病理研修では、病理専門医を目指す者に対しては幅広い症例の経験を目標とし、臨床医を目指す者がその基礎となる病理を学びたい者においては、個々の進路・希望を尊重しながら研修内容・ペースを決めていきます。研修期間は原則として12ヶ月、6ヶ月、2ヶ月から選択するものとしますが、1ヶ月などの短期研修なども受け入れる予定ですのであらかじめ相談してください。

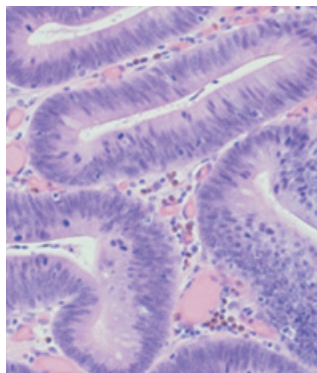
研修内容と到達目標

一般目標としては、実際の病理診断を経験しながら病院における病理検査の役割を理解し、基礎的な病理学的手技についても理解・実践でき、それらについてプレゼンテーションができること、とします。以下に2ヶ月コースの内容(到達目標)を示しますが、12ヶ月、6ヶ月コースにおいても研修内容や形式はほぼ変わらず、さらに多くの幅広い症例を経験することができます。

- ①基礎となる薄切、HE染色などの標本作製を経験します。
- ②生検・手術など50症例以上/月を原則として担当し、検鏡から病理報告書作成までを行います。
- ③上級医の切り出しの介助を行い、外科材料の担当症例については自ら切り出しを行います。
- ④剖検例を介助者として経験し、CPCに参加します。

以上の内容は、上級医のマンツーマン指導の下、行われます。

また、部内カンファランスで症例提示を行い、院内の各種研究会・勉強会にも参加します。



評価方法

病理診断件数・内容、研修姿勢、協調性、積極性などを考慮し、総合的に評価します。

CPC(剖検症例検討会)研修について

CPC研修は、病理選択の有無に関わらず2年間の初期研修期間中に全員に課せられる義務項目です。具体的には病理解剖出席(1症例以上)、CPC出席(2症例以上)、CPCレポート提出(2症例以上)の3項目が当院では義務づけられています。ちなみに日本病理学会が提言するCPC研修目標としては以下の6つが挙げられており、個々の希望・熱意に応じて研修項目の増量・追加を受け入れます。

- ①病理解剖の法的制約・手続きを説明できる
- ②ご遺族に対して病理解剖の目的と意義を説明できる
- ③ご遺体に対して礼を持って接する
- ④臨床経過とその問題点を的確に説明できる
- ⑤病理所見(肉眼・組織像)とその示す意味を説明できる
- ⑥症例報告が出来る

病理解剖とは？

病理解剖は「回帰と再出発」の場である。

病変を直に目にする事で、不幸な転帰を来した病態の診断治療が妥当であったのか、それを静かに振り返る場である。

または、人体の精巧さにいま一度触れることで、医学生時代の系統解剖で感じた純粹な驚きと敬虔な気持ちを取り戻す場である。

あるいは、死を受け入れざるを得なかった患者の無念を思い、遺族のやるせなさや喪失感に思いを馳せる場でもある。

そのような場であるが故、病理解剖を生前における臨床的評価の単なる「答え合わせ」に終わらせず、病態の本質や因果の解明に迫る「高い志」を持たなければならない。

ひょっとするとそこで未知なるものに遭遇し、そこから新たな研究が展開するかもしれない。

「振り返り戻る」場であると同時に「今後の礎」が提供される場——未だ測り知れない可能性を秘める病理解剖を生かすも殺すもあなた次第。



週間スケジュール

月曜日	抄読会、ランチ・ミーティング 細胞診カンファランス
火曜日	切り出し、検鏡 教室ミーティング(CPC随時)
水曜日	切り出し、検鏡
木曜日	切り出し、検鏡
金曜日	切り出し、検鏡
土曜日	検鏡

専門研修プログラムの特徴

基本領域専門医である病理専門医（およびサブスペシャリティである細胞診専門医）資格取得を目指す者を対象とするプログラムです。なお日本病理学会では、平成29年度においては日本専門医機構の方針に準拠した研修プログラムを用いて、学会主導で専門医研修を実施することをいち早く決定しています。（平成30年度も同様）。対象者は、専攻医として3年間、上級医の指導のもとで病理医としての実地経験を積んでいきます。具体的には病理学会あるいは臨床細胞学会の専門医受験資格にある条件をクリアすることを最低限の目標とし、個々の興味・ペースを尊重しながら幅広い症例を経験していきます。

研修プログラム名

大阪医科大学病理専門研修プログラム

プログラム受入数

希望受入数 2名/年程度

プログラム期間

3年間

取得できる専門医・資格

病理専門医/細胞診専門医（サブスペシャリティ）/死体解剖資格

参加学会等

日本病理学会/日本臨床細胞学会

研修プログラムの内容

病理学会の専門医受験資格をクリアするために、OJTに基づく病理診断を重視しながら、専門医として活躍できるような経験を積みます。具体的な活動目標を下に列挙しておきます。この研修は基幹施設においてのみならず、地域医療貢献として1~2日/週程度の連携施設における研修も義務づけています。連携施設としては大阪府内の6病院で構成されており、各施設への移動・アクセスが容易であることも特徴です。また、病理診断技能のみならず、臨床医・コメディカルとのコミュニケーション・多職種連携、医師としての人間性・倫理性などにも配慮した、総合的研修を目指しています。

- ①生検・手術などの病理診断症例150例/月以上を担当します。
- ②担当症例については自ら切り出しをし、病理報告書作成までを行います。
- ③細胞診についてはプレ・スクリーニングとして実地業務に入るかたちで、陰性陽性例あわせて30例/月以上を担当します。
- ④基幹および関連施設の剖検症例を担当します。
- ⑤CPC・各種カンファランスに積極的に参加します。
- ⑥学内外の研究会・学会での発表、論文作成（まずは症例報告）を行います。

以上の内容は、原則として上級医の指導の下に行われますが、ある程度の経験の後にはその一部を自立・自発的に行われることが期待されます。

専門医受験資格

日本病理学会による「病理診断に関わる研修についての細則」等で、専門研修として修了すべき項目として、以下のような数値目標を掲げています。これらに対応して本プログラムは、できるだけ最短での病理専門医取得を目指す内容となっています。

- ①病理解剖症例数30例以上（原則として主執刀で、報告書を作成した例）
- ②生検ならびに切除検体の病理診断数5000件以上
- ③術中迅速診断数50件以上
- ④細胞診診断数1000件以上（スクリーニング・陰性例を含む）
- ⑤解剖症例の組織標本作製2例以上
- ⑥人体病理学に関する原著論文または学会報告が3編以上

プログラムに参加する医療機関等

基幹施設）大阪医科大学附属病院

連携施設）済生会吹田病院/市立ひらかた病院/北摂総合病院/多根総合病院/守口敬任会病院/大阪府立呼吸器・アレルギー医療センター

専門医取得後について

専門医取得後は、臨床病理医として活躍する、実験病理医としてポジションを得る等、様々な将来像を描くことが可能で、具体的には①病院・病理学教室スタッフとなる、②大学院進学、③国内外への留学、など様々な選択肢があり、個々の興味・希望を尊重したかたちで進路を決めていきます。加えて強調したいのが、病理は身体的負荷が少ないこと、時間拘束がゆるやかなことから女性医師にもやさしく、経験が重視されることから現役として長く活躍することが可能です。しかし現在、全国で活躍する現役病理医は二千人足らず。病理医不在の大規模病院も珍しくなく、圧倒的に不足していることが指摘されています。

いま病理医はあらゆる場面で求められています。病理に興味を持つ若手医師が増えることを願ってやみません。



大学院における教育・研究活動

教育・研究指導方針

病理部・病理診断科には大学院の設置はなく、病理学教室の大学院に所属するか、臨床系各教室の大学院からの派遣の形式をとります。(詳細は病理学教室の頁を参照して下さい)



標本作製。生検材料の切り出しを行っています。